自立と体験３・自立と体験４

「明星大学独自のキャリア教育」の構築に向けて
～「児玉九十自伝」にみるキャリア教育的発言～

榎　本　達　彦※

はじめに

2012 年 4 月明星大学「キャリア教育科目」として「自立と体験 3」および「自立と体験 4」が開講された。「自立と体験 3」は 2 年次対象で後期に、「自立と体験 4」は 3 年次対象科目として前期に行われた。「『自立と体験 4』報告」にあるように両科目とも株式会社リアセック（以下リアセック）と明星教育センターが協同で授業内容を作成した。筆者もこの作業に明星教育センターのメンバーとして参画した。

明星教育センターはこのプロジェクトについて、明星大学独自のキャリア教育プログラムを構築するという意図をもって臨んだ。そのことは、事前の打ち合わせの中で、講座名を「自立と体験 3」、「自立と体験 4」としたことにも現れている。それはすなわち、内容も明星学苑の教育理念および明星大学の教育理念をベースに構築されることになる、ということである。このことについては、協力を仰ぐ業者選定の段階でも各企業に対して伝えていたし、選定後、リアセックとの打ち合わせにおいてもそのことを強く主張した。外部の業者を導入するにあたっては、業者側からキャリア教育一般の考え方で諸々の提案をする傾向が予測され、そのことを極力排除する必要があった。

実際授業内容、教案、教材作成にあたっては、リアセックとの共同作業で討議を重ね、リアセックが自社のノウハウ、教材を用いて提案をする。その提案を明星教育センターがチェックし、意見を述べ、要望を出し、リアセックが再提案するということを何度も繰り返しながら、作業は進んでいった。このような過程を経て、シラバスや教案、教材が出来上がり、予定通り「自立と体験 4」は 4 月から「自立と体験 3」は後期 9 月から開講するに至った。以下文中では「自立と体験 1」、「自立と体験 3」、「自立と体験 4」を合わせた明星教育センターの初年次教育科目、キャリア教育科目を「自立と体験」と番号を抜いて表現することとする。

筆者は、授業内容、教案、教材を作成していく過程で、リアセックと討議をしながら、「明星大学独自のキャリア教育」についていろいろと考えた。実際、リアセックとの討議の中で、こちらの意図がリアセックにうまく伝わらなかったり、伝えたと思ったことが、実際に出ててきた教案などにきちんと反映されていなかったりということが少なからずあった。それは相手の理解力不足というよりは、伝える側として「明星大学らしさ」をどう理解し、どう伝えるかという部分の力量のなさを、筆者は実感したのである。

ここで伝えるべきことは 2 つあると思われる、ひとつは今の明星大学生の現状であり、もうひとつはその学生に対して、どういう教育をするかということである。前者についてはリアセックも大学での初年次教育やキャリア教育を専門としている会社なのでそれなりの理解はある。ただ、その学生に対して明星大学としてどういうキャリア教育をしたいのか、ということが実は重要なのである。それが、うまく伝わらず、リアセックが派遣した講師の行う実際の授業を見ても、違和感を感じることが多々あったのである。

そういうこともあり、筆者はもう一度、明星教育の原点に戻って、「明星大学独自のキャリア教育」につながる思想について考察したいと思ったのである。そして、まずは、明星学苑および明星大学の創立者である児玉九十の著

※ 人文学部　特任准教授　明星教育センター

書をあたり、そこに明星大学独自のキャリア観を探れないかと考えた。今回は「児玉九十自伝」にある児玉の発言のなかから、キャリアにつながる発言を集める作業を行ない、それと明星大学のキャリア教育、「自立と体験」の関連付けをおこなった。今の段階では、「児玉九十のキャリア観試論」あるいは「児玉九十キャリア観についてのノート」の段階での発表となるが、今後、より広い範囲での児玉の発言を追いかけ、「明星大学独自のキャリア教育」に結びつく「児玉九十のキャリア観」を明らかにしたいと考えている。

1.「古人が馬齢を恐れた意味がしみじみとわかります。それはほしいままな生の空費を戒め、無限にきびしく生きようとねがう心であろうと思いますが、考えてみれば、<u>馬齢であるかないかの基準は、外的なものよりむしろ、自己の内面に問いただしてこそ決まる</u>のではなかろうかと思います。」（「児玉九十自伝」；以下「自伝」p14 下段）

この文章の前半部分は児玉の生きる上での哲学であるが、後半の下線部は極めてキャリア的な意味合いを含んでいると思われる。ひとつには人間の評価の基準についてである。ここで児玉は、人の人生が馬齢であるかどうかは、他者が判断するのはなく、その人自らが自分の判断で決めることであると言っている。今の大学や学生の評価は偏差値で見られる。偏差値の高い大学は「良い」大学であり、その大学の学生は「頭の良い」学生と表現される。そして、ほとんどの学生が偏差値による優越感と劣等感の只中で学生生活を送っているのである。

しかし、ここで児玉は「基準は、外的なものよりむしろ自己の内面に問いただして・・・」と、その偏差値による評価を否定している。「君の評価は、君自身がどれだけ頑張り、どれだけ一生懸命に生きて（勉強して）いるかを自ら判断するものだよ」というのが児玉流である。大学に入るにあたっては、日本の入試の現状では偏差値による評価が現実には意味を持つようになっている。しかし、それは大学入試に関してであって、その学生の人間としての評価では決してない。

明星大学の入試偏差値は決して高いものではない、しかし、偏差値の高低は個々の学生の人間としての評価ではない。むしろ、大学に入学して、その学生が何を学び、何を体験し、成長しているかということこそが評価されるべきである。明星大学における学生評価もそのような視点が再考されるべきではないだろうか。

二つ目は、そのあとに述べている「自己の内面に問いただしてこそ決まる」という部分である。ここでは、「自己の内面に問いただす」という手法に着目したい。キャリア教育においては、自己理解が重要事項のひとつである。キャリアは個人が社会で生きていくことがそのテーマである。従って、キャリア教育においては、自己理解と社会の理解、そしてその両者の理解の上に、自己と社会の関わり、社会化という問題が出てくるのである。

その時になんといっても、自己理解が第一に来る。自分自身の価値観を基準に社会を見、社会を理解することとなる。自分のことは自分が一番知っている。しかし、その自分をどこまで理解しているかと振り返ると心もとない、そしてその自分を表現するのはもっと難しい。人が社会人として生きていく上では、この自己理解と自己表現がとても大事になってくるのである。

そして、自己理解のひとつの方法が内省あるいは自省である。「自立と体験」のなかでは、個人ワーク、協同学習をした後に、それらの「ワークを振り返る」という作業を行うが、その振り返りが内省、自省に当る手法である。また、キャリアデザインや価値観に関する授業では、過去の振り返りをすることで、ここでもまた内省、自省的な手法を取り入れている。

2.「子どもにとって、いい先生とかよくない先生とかの認識はありえません。それは唯一無二の絶対者であり、そういうものに導かれることによってはじめて、うら若い脳細胞は発動するはずのものなのです。

<u>私は様々な「なぜ？」を胸に秘めて、先生に立ち向かいました。それにたいする原先生の回答はすこぶる明快であ</u>

り、私はその知的雰囲気に酔う思いがしました。私はたしかに精神的な脱皮というべきものを経験しつつあったようです。」（「自伝」p23 下段）

ここで児玉が述べていることのひとつは、教師が学生にきちんと対峙することの重要性である。これは当たり前のことであるが、実際はなかなか出来ないことである。2012 年度の「自立と体験 3」と「自立と体験 4」の授業においても決められた教案をスケジュール通りにこなすのか、それともクラスの学生の状況を大事にして授業を進めていくのかは再三議論になっていた。リアセックは外注業者として、早期に結果を出すということが営業上も至上命題化するのは当然である。そういうことで、リアセックから派遣された講師たちには講座のレベルと進度の統一が求められ、また授業の進め方、授業における学生への語りについても指導を受け、画一化されてくることは否めない。それは講師の質の問題ではない。

ただ、外注業者の姿勢が明星大学のキャリア教育として適しているかどうかは別問題である。むしろそこに外注の限界があるといえるかもしれない。明星流は、きちんと目の前の学生に教師が向かい、そこでの問いの意味、学生がそれを理解しているかどうか、また何を求めているのか等を読み取り、「いまここ」にいる学生に向かい合うことこそが大切なのである。

ふたつめは、「なぜ？」という問いの意味である。ここで児玉が言っているのは、生徒である児玉が原先生に対して「なぜ？」を発し、それに対して原先生がきちんと回答してくれているという場面である。この立場を逆にしてみると、われわれ教員が学生に対するときの対応の仕方になる。

「自立と体験」では、個人ワーク、協同学習（グループワーク）が多用されるが、そこで重要なのは教員による学生への問いかけ、ファシリテーションである。この場合のファシリテーションは学生を動かしたり、指示するものではなく、教員の問いかけによって、学生自らが考えるきっかけをつくること、そして実際に学生が考えることにある。だから、学生の中に「なぜ？」を生じさせることが大事になって来るのである。

最後は「私はその知的雰囲気に酔う思いがしました」の箇所であるが、ここでは学ぶ場の雰囲気、まさに場作りの大切さが述べられている。「自立と体験」では、積極的な授業参加が求められ、自ら考えたり、協同学習が多用される。このような授業においては、クラスの参加意識や学ぶ意識が高いことが求められる。それは単に学生の意識ということではなく、教員も含めたクラス全体の意識なのである。キャリア教育のなかでは「場づくり」という言い方をするが、ここで児玉が述べていることはまさに、この「場づくり」に対応するものである。

しかし、「場づくり」はこうやるもの、という唯一のノウハウではない。教師自らが、積極的に学び合うという意識で学生に対峙するという姿勢が大事なのではないか。大学とは本来、「○○を学びたい」という強い意識を持った学生と、その学生のニーズにきちんと答える力をもった教員がいて成り立つ機関である。しかし、それらの意識が低くなっている大学やクラスにおいては、この場づくりがその意識の低下を補うものとなってくる。

3.「また、私はこのころから日記をつけはじめました。日記は自分で紙をとじ、学級日誌にヒントを得て、月日、天候などを書き入れる欄をつくりました。その日その日にあったこと、読んだ本のこと、また新しく考えついた空想などについて、こまごまと書き綴ってゆくのは楽しみでした。私は私なりのやり方で自分自身を見つめ始めていたようです。

一般に、この世代特有の、排他的で傷つきやすい心は反射的に将来への空想をたくましくするものです。私は精一杯の理想をかかげた未来図を胸に描いてそれに熱中していました。それは広大な原野をひらいて、思いのままなユートピアを建設することであったり、宗教家となって、蛮地の人々を救済することに生涯を捧げる悲劇的なヒーローであったりしました。」（p39 下段～ p40 上段）

この前段で述べられている日記書くということは、自らの体験をきちんと記載しておくこと、また、振り返って過去の体験を思いだし、その時の思いや気持ちを思いうかべることにもつながる手法である。体験や振り返りをそのままにしておくのではなく、それをきちんと文章化することによって、実はその自らの体験を客体化し、そのことが自己理解につながっていく。これはまさにキャリア教育の中で行われる自己分析や自己理解のための手法と同じものである。

「自立と体験」では前述のように「振り返り」という手法を重視する。学生が体験したことについて振り返り、その体験中の自分自身を客観視する。その過程での気づき、学びを確認するということを重視することである。児玉が前段の最後に述べている「私は私なりのやり方で自分自身を見つめ始めていたようです」という箇所は、まさに自分の体験を記述することで自分自身を見つめ、そのことによって自己理解が深まるとういことである。

また後段では、自分の将来を描く、今現在の様々な条件を取り除いて、ユートピアとしての自分の将来像を描くという児玉の体験を語っている。このことは、比較的近い未来である、例えば学生が自分の卒業時の姿を描いたり、社会に一歩踏み出したその時のなりたい自分を描くことで、将来のなりたい自分に向けて自らを一歩前に押し出す力になるということと同じである。

例えば、「自立と体験 1」における「10 年後の自分への手紙」や「大学生活デザインシート」で描く、卒業時のあるいは社会人になった自分を想像するというワークである。自分の目標を掲げることによって目標を明確にすることは、大学生活そのものを充実したものにするひとつの方法である。

4.「ところで自分の夢を支えてくれるものは、いろいろなものを読み漁ることによって吸収される無限の知識の世界でした。勉学も含めて、何かに励んでいるかぎり、私の脳裏から夢は消え去ることはなかったのです。」（p41 上段）

この短い文章で、児玉が行っているのはいわゆる教養教育についてである。前の項で述べた、将来の自分像、ユートピア、夢はそのままでは消えてしまうかもしれない。それを実現するためには、「無限の知識」を得、それに向かって励むことが大事である。現在の「自立と体験」ではこの教養教育については、直接は触れていないが、大学という場の特性を考えても初年次教育、キャリア教育において、教養教育は決して外せない重要事項であろう。今後の課題の一つでもある。

何かを感じ考えるとき、そしてさらにそれを深めるとき、あるいは人と討議をするとき、知識が必要となってくる。知識が多ければ多いほど、事柄を深く考えることが出来る。また、大学という場で、一定程度のレベルの研究をするためには、それ相応の知識や教養が必要となってくる。

5.「いい友達もできました。大溝いさむ君と、溝田三造君という友達です。二人とも流石に街の子らしく利発で、頭がよく、私の知らない新しい知識をいっぱい持っていました。・・・（中略）・・・あるとき、私たちは大井川の堤防にねころんで、機関車の原理について議論したことがあります二人の友人は『スチーム』とか『サイクル』とかと、英語を使ってさかんに新知識を発表しました。私は蒸気機関車がどのような仕組みで走るのか、はっきりした知識をもっていなかったのです。おぼろげにわかっていても、こまかい組織について説明する二人の博識には、とてもかないませんでした。

私は恥ずかしさを覚えました。これはしっかりと勉強しないと二人におくれをとるぞ、とそのとき真剣に考えました。」（p41 上段～下段）

多様な学生と関わること、自他の違いを認識すること、多様な価値観を持った学生同士が交わり、意見を交換する中で気づき、学ぶこと、これは「自立と体験」全体を通してのこの授業に独特の学びの手法である。

児玉は、掛川中学校に入学し親元を離れて寮生活をしながら中学時代を過ごすのであるが、まさにここで彼は自分とは違う友人と出会うことになる。そして、多様な友人たち、多様な価値観を持った友人たちと出会い、交わることで自らの姿に気づき、さらに一歩前に進むモチベーションを高めたといっている。まさに「自立と体験」における学びあるいはこの授業の意味を、児玉は掛川中学校での生活の中で体験しているのである。100 年以上前に、である。

「自立と体験」ではそのクラス構成を学部学科横断を原則としている。今年度の「自立と体験 3」と「自立と体験 4」では諸事情により、単独の学科でクラスを構成したが、本来は多様な学生が一堂に会し交流することに大きな意味があると考えている。人が物事を学ぶひとつの形は、多様なものとの出会いである。もちろん、出会いだけで学べるわけではないがそれが出発点となることは間違いない。多様なメンバーによるグループでの交流は初年次教育やキャリア教育においては非常に重要な要素となってくるのである。

6.「掛川中学高学年のころの私の精神世界はようやく『報徳実践』の理論で固まりつつありました。それは岡田良一郎先生から受けた強烈な宮尊徳像と小松先生、長谷川先生から受ける歴史学の世界とがゆっくりと重なりはじめていたと言えます。しかしまだ、それがどのような形で私の将来に実を結ぶかははっきりしていませんでした。ただ、「報徳実践」が非常にわかりやすく、しかも同時にもっとも難しい問題だということが漠然と理解できる状態でしたので、まず二宮尊徳という巨峰をきわめてみなければならない、と私は考えました。」（p79 上段～下段）

「当時（注；王陽明の時代の中国 16 世紀頃）全盛を誇っていた朱子学は、批判を許さぬ権威を持ちながら、実践性を失っていたのです。これに疑問を持った王陽明は、儒学の実践性復興を意図して起ち上がり、『知行合一』を主張したのです。

すなわち<u>「行」をはなれてたんなる『知』」は存在しない、知は行によってはじめて真の知となりうる</u>、･･･（中略）･･･<u>どのような人間にもその心の中には『良知』が厳然と存在する</u>、それを致すこと、すなわち『行』を実現することが儒学の根本だとするのであります。<u>人間は、ひとたび我が心に『良知』が自覚されるならば、その絶大な力のまえに、いかなる悪も“炉に投げ入れられた一片の雪”のごとくである</u>と説きます」（p98 上段～ 98 下段）

児玉は旧制第四高等学校（現金沢大学）でその後の思想の根本となるものに出会い、それを確たるものとする。それが、二宮尊徳の「報徳実践」であり、王陽明の「知行合一」の思想である。ここでは両者の思想を詳しく説明しないが、特に引用文の下線部分についてみると、前者は明らかに明星学苑の教育理念の一つである「体験教育」を意味している。行すなわち行動であるから、それは体験でもある。そうすると、ここの文章は、「体験と無関係な知はない。知は体験を通してはじめて、その人にとっての真の知となる」と読める。つまり、まさにこれが明星大学における「自立と体験」の基本の考え方ではないだろうか。

順序は逆になるが、上記引用 6 の（中略）前の前半は二宮尊徳についての記述である。「報徳実践」とは「自分自身のことばかりでなく、社会全体の進歩や幸福を考えて行動すると、それが結局は自分に戻ってくる」という意味である。この二宮尊徳の考え方は児玉の根本的な思想であり、教育に向かう時の姿勢でもある。それが前述の王陽明の思想と重なり、「体験教育」に結実するのである。

また、後者の下線部分は何を示しているのだろうか。「どのような人間にも心の中には『良知』が厳然とある」の部分は、人間の可能性を信じる児玉の意識が現れている。すなわち、どの学生も無限の可能性を秘めている。そして、学生の秘めたる可能性を引き出す一つのきっかけとしての授業、「自立と体験」の存在意義がそこにあるのである。学生がその絶大な力を見出すのは、秘めたる「良知」を自覚するときであるのだから、「自立と体験」ではその自覚

を促すことこそが大事な役目なのである。

このように読んでいくと、二宮尊徳の「報徳実践」と王陽明の「知行合一」の思想は児玉の思想の根源であると同時に、明星教育の理念の根源であるということが出来る。

7.「･･･四高には以前から「擬国会」という模擬国会をひらいて、ときの政治的諸問題を論ずるという催しがあり･･･。学生の、時代にたいする反応、政治的関心の高揚という意味からいえば、一種の学生運動ともとれぬことはないのですが、当時、各学校で演じられていた次元の低い、小競り合いにみられるような社会主義的なものではなく、擬国会はあくまでも正統的でアカデミックでさえありましたから、大多数の学生の参加が得られて、盛大におこなうことができたのだろうと思います。

話は込み入っていきますが、「擬国会」の期限には明らかに学生の政治参加があったのです。

（中略）

これを機に、四高生は政治的にはっきりと目覚めることとなり、弁論を練ることへの関心が高まっていったわけです。」（P112 上段～ p113 上段）

ここで児玉が述べている「政治的関心」は今の状況に当てはめて言えば、「社会への関心」ということになるであろう。9. の項目にもあるように、当時は政治の時代であったので、このような表現になったものと思われる。いずれにしろ、数年後に社会に出て行く学生が社会への関心を持ち、社会を視野に入れて大学での学習や自らの将来を考えることは当然のことである。

しかし、時代のせいなのか今の学生の意識の問題なのか、社会への関心の薄い学生がかなり多いように思われる。昨今の選挙における報道でも、若者の政治離れ、選挙離れがひとつの社会現象として取り上げられている。戦後の日本の教育においては、「政治的」であることはあまり評価されない。当然、学校教育において政治的なものを極力排除されこととなる。つまり、今の若者の政治あるいは社会への関心が低いのは当然なのである。

下線部の部分の政治を社会に置き換えて考えれば、学生が社会への関心を持つことで、自ら考えたり、仲間や教員と討議したりすることで思考力やコミュニケーション能力を高め、自ら行動する力を身につけることになる、というのが児玉の主張である。

そのように考えると、「自立と体験」において学生の社会への関心を高め、社会化をはかることは、学生の学ぶ意識や知的好奇心を高めることにつながることとなる。もちろん、突然社会で起きていることを学生の目の前に持ってくれば良い訳でなく、「今の学生」が関心を持つことを一つのきっかけとして関心を広げていくことが必要であることはいうまでもあるまい。

8.「<u>自己の適性を見きわめ、発掘するのはあくまでも自分自身以外にはありません。</u>その意味では、教養課程ともいうべき高等学校（著者注；旧制高等学校）3 年間というものは、非常に貴重な時期だと思います。語学と基礎学科と、そしてそれらを補うおびただしい読書と知的な人間関係のなかで過ごす修練の時代があってはじめて、自己の道を明確に掴むことができるわけです。すなわち『師』は学問を通じてその道を指し示すだけであります。『弟子』はその道の賢さを自らの努力で切りひらいてゆかねばならないのです。」（P126 下段～ p127 上段）

この文章は児玉の帝国大学時代の回想であるが、児玉自身が社会に出てどのような生き方（仕事）をするかをリアルに考え始める過程でのことであろう。最初の下線部分では、自分の人生は自分自身で決めるしかない、それは必然

あるあるいは自明であることをはっきり述べている。自分のこれまで生きて来た20年程の歴史を振り返り、自分の様々の行動や考えて来たことを思い出しながら、自らの適性を自分自身で見いだすのである。

明星大学生にとっての「自立と体験」は、まさにこのような思索のきっかけとなるべきなのである。授業を通してそれを知ることはない、しかしその思索を自ら押し進めることで、自分を発見することが出来るのである。

後段で児玉が述べているのは、そのような思索を進めるためには、基礎的な教養が必要である。それは高校までの勉強と大学に入っての勉強、そして読書で養われると言っている。「自立と体験」においてはこの教養はいまのところ範囲外になっているが、前述のように思索をともなうキャリア教育には当然教養や知識が必要になるのだから、明星大学のキャリア教育を考えるにあたって、教養教育を考慮することは必然的なことではないだろうか。

9.「(前略)　こまかいことは別として、わが国の三大困難といわれる経済難、外交難、思想難は依然として国民の頭上に重くのしかかっている。

このような国家の危機にのぞんでいながら、一般の風潮は、はたして困難に直面している国民的態度といえるであろうか。私は遺憾ながら一般国民に、大難にうち向かっている者としての真剣味、緊張味をみとめることができないのである。最近のわが国の悪風には、打ち破らねばならないものが非常に多い。そのうちで、もっとも根本的なものは、自分は実行しないで、他人にばかり実行を要求するという風習である。この悪風は、現代社会の各層にひろがりしみこみ、現代人の心をむしばんでいる毒素といわねばならない。　(中略)　このように、社会を構成する各人がすべて、自分は実行しないで他に依頼し、自己に責任を負わないで他を責めることばかりに傾いて・・・(中略)。

それゆえ、われわれは何ごとにたいしてもまず自らが責任を負うことによって、積極的に、ものごとの解決をはかるという実行の気風を養うことが、現在のわが国の急務中の急務であると信じる。したがって、社会全体に向かって実行の気風の進行をはかるとともに、教育によって、次世代の国民の精神をりっぱに確立することにつとめなければならないと思う。私たちが、体験を根本とする教育によって、日夜生徒の薫陶に没頭しているのもまさにこのためである。

(中略)・・・私たちの主張する体験教育は、頭脳をみがくことに力をつくすと同時に、頭脳の働きそのものを全身に表現し実行できるように導く教育である。・・・(中略)・・・それゆえこの教育は、思索と体験一致の教育ともいえるし、考行一貫の教育といってもよい。」(p214 上段～同下段)

上記 9. とあとの 10. の文章は児玉が明星学苑の校報「体験教育」第 1 号（昭和 4 年 1 月 1 日発行）の冒頭言として書いた文章からの引用である。

本論とは直接関係ないかもしれないが、この引用文で印象的だったのは、最初の文章「こまかいことは別として、わが国の三大困難といわれる経済難、外交難、思想難は依然として国民の頭上に重くのしかかっている」である。最後の思想難は社会難に置き換えてみるとして、昭和初期のこの時期と平成の今との類似性である。あるいは、時代を超えて日本がもつ独特の問題性なのかもしれない。

それはともかくとして、校報「体験教育」の第 1 号で児玉は明星学苑が育成すべき生徒・学生像を述べている。それが「自ら実行する人」でありそのための教育のキーワードが「体験」なのである。明星学苑の建学の精神である「和の精神のもと、世界に貢献する人を育成する」および大学の教育目標である「自己実現を目指し社会貢献ができる人の育成」にある貢献する人はまさに自ら実行する人である。

体験教育を通して育成されるのは頭脳と身体、思索と行動のバランスの取れた人間である。

10.　この教育を行うためには、教師はただ教壇だけを活動の場としてはならない。また、教科書や機会標本だけがこ

の上ない教材だと考えてもならない。教場、運動場、寄宿舎、通学途上、旅行など、いつ、どんな場所でも生徒の中に立ちまじって、徳育、教育、体育などの方面にも自己の頭脳と身体の全力を傾注して教え子を指導し、生徒を自由自在に活動できる頭脳と体力の持ち主に育て上げるようつとめるべきである。（p215 上段）

児玉がここで述べていることは、体験教育のもっとも特徴的な部分である。体験とは誰もが、どこででもすることが出来ることである。いうなれば、人間が生きるとは無数の体験をし続けることであると言い換えてもいいくらいである。もちろん、一般の教科書であったり、教師が作った教材は教育において有効なものであることは自明のことであろう。しかし、児玉が言う「教場、運動場、寄宿舎、通学途上、旅行など」を教材と見ない、教材から外したとしたら、学生が学ぶ機会の多くを失うことになる。

「いつどんな時」もそこには教材が、学ぶ機会がある、ということは「いまここ」でおこっていることの中こそが貴重な学びの宝庫だということである。それを教材としてみるかどうか、それが教師の努力の結果であることも児玉はここで明確に述べている。その努力とは、学生とただ一緒にいて、見ているのではなく、「立ちまじって」、「全力を傾注して」行くことが大事なのである。「立ちまじって」、「全力を傾注」してということがどういうことかといえば、学生の言葉や表情から今の学生の状態を汲み取り、そのことからいま何をするかを判断し、行動するということである。

教師のその努力が、自ら考え、学び、判断して行動する学生を育成することができるのである。

11.「私が、創立のはじめから、凝念・心力歌のほかに、もう一つ、勤労教育としての作業を課したことは、明星の特色と言ってよいでしょう。教師・生徒の自発的活動によって、日々の学校生活をすすめていくのが本校の体験教育です。だからすべての行事はどれをとってみても作業ということができるのですが、とくに勤労精神を養うために、園芸、除草、草刈り、樹木手入れ、屋内外の掃除など、生徒に適し、生徒に出来ることはいっさい生徒の手で行わせるようにしたのが「作業」なのです。（中略）ことに、日本人のもっとも欠陥とする協同精神を養うには、作業がもっとも効果があります。（中略）・・・作業にはルールがあります。作業計画、実施、完了検討という段階の仕事は、どのような作業についても必要ですから、この三段階は決して怠ってはなりません。」（p221 下段～ p222 下段）

明星学苑（明星実務学校）の創立期についての記述を読むと、その当時の学苑のまわりは道路も整備されておらず、教師や生徒が率先して道普請をし、自分たちはもちろん地域の人々の利便性を高めたということである。そういう、必然的にしていた作業という体験を通して、児玉は生徒たちに「体験教育」を施している。その必然が明星大学の教育理念であることもまた面白いところである。

この児玉の文章を読みながら、「自立と体験 1」の前身の「自立と体験」を人文学部で担当したときのことを思い出した。筆者は、この授業の単位認定の条件として、学内の掃除をすることにしたことがある。掃除といっても、半期の授業中の 1 日、昼休みの 20 分くらいである。この話をすると、多くの学生は「エーッ」といい、掃除をする日もうつむき加減で嫌そうな顔で来る。

でも、例えば天気の良い日で、友達とキャンパスをぐるりと回ってくると、帰ってきたときの顔は多くがニコニコ顔である。「結構楽しかった」、「キレイになるっていいね」、「大学のなかに知らないところがたくさんあった」、「こんなにゴミ拾ってきたよ」、「こんなところにまでゴミ捨てるなんて・・・」、「これからは友達がゴミをポイ捨てしたら、きちんと言える」、「また来るよ」等々。本当に、何度も掃除に来る学生もいたし、それがきっかけでお掃除サークルを作った学生もいた。

実際に、何人かで体を動かして何かをすることを「作業」というとしたら、やはり作業には大きな学びの種がある

ように思う。そう考えると、作業には社会との関わり、協同学習（活動）という側面があることがわかる。

12.「第二次世界大戦後の世界各国は、自国の産業振興に全力を注ぎ、互いに覇を争う国際商工業競争時代を現出していました。資源に乏しいわが国がこれらの競争に堪え、国の繁栄を招来するには、高度の科学技術を中心とした強い道義心と、すぐれた技術によって生きぬく以外に方途はないとされ、これに適する人材の育成が焦眉の急務でありました。それはまさに、永きにわたる「健康、真面目、努力」を信条に「和」の精神を理想とする「明星における人間教育」を基盤にしてこそできることであり、これを最高学府としての大学において実現することが私たちの念願でした。」（p403 上段）

この文章は明星大学創立の「設立趣意書」からの引用である。明星学苑が大学を設立した目的が端的に述べられている。見方をかえるとそれは明星大学が育成する学生像でもある。

第二次世界大戦後の世界を工業化とビジネスの世界になると予測している。もう一つは、単に工業技術やビジネススキルだけではなく、それを支える倫理観（「強い道義心」を兼ね備えた人材育成である。これは「健康、真面目、努力」を心情とする児玉（明星学苑）らしい発想である。初年次教育やキャリア教育はもちろん、専門分野としての工業技術やビジネススキルを付与するものではない。しかし、社会に出ること、仕事に携わること、家庭を育むこと、生きていくことの倫理と哲学を付与する機会はありえるのではないかと思う。

今後に向けて

今回、「児玉九十自伝」のなかから。児玉九十の初年次教育、キャリア教育的発言を拾い集め、筆者なりにコメントをつけた。この作業をする中で、対象著書を広げて児玉発言から「明星大学独自のキャリア教育」に関わる内容を引き出し、それを現在の社会的、明星大学的状況に合わせて生かしていく可能性を強く感じた。

これはひとつのきっかけであり、幅を広げることももちろんだが、より一層丁寧な読み込みも必要になってくる。それは、次に向けての筆者の課題である。

了